



書評 林 徹著

「林徹句集」を読んで

広島グリーンヒル病院 結 城 いさお 庸

林 徹先生の名は哲夫。元広島鉄道病院耳鼻科部長。県の保険課を経て、引き続き社会保険事務局で医療保険の審査や指導に従事しておられる。

俳句については、俳人協会広島県支部長であり、広島市医師会俳句会の指導をしていただいて15年になる。NHKテレビで毎月俳句の講座を開いておられ、読売新聞の広島俳壇選者をも担当。

月刊の俳句誌『雉』を主宰されて20年、今や全国版になっている。平成13年には俳人協会賞を受賞され、林先生は日本を代表する俳人の一人といえる。

この度、表題の句集が出版されて、たより編集部から私に書評の依頼があったので、僭越ながら諸先輩を差し置いて寄稿させていただいた。

この俳句集は、これまでに発刊された句集：『架橋』『直路』『群青』『飛花』の4冊から、300句を精選したいわば生涯の作ともいえるものである。（これらの句集の幾つかは書評として、すでに広島市医師会だよりに掲載されている）

林先生は古くから澤木欣一の「風」同人であって、早熟の俳人というべく、第一句集『架橋』は36歳の出版であった。

さて林徹句集を読んで、先ずご家族やお孫さんを詠じたほのぼのとした句が多いのに気づく。

栗咲きて風の中なる妻子の灯
七階に雛を飾りて海青し
雛の間に眠りおちたる赤子の香

青春の詠嘆の句があり、その後重症の肝炎や二度の大手術を経て先生は、「俳句に人生を鍛えられた五十年」と述べておられる。

元日の生卵搔き宿直す
犬と食ふ餅幾たびも不幸経て
ひとふゆを病みたり夕日ゆらぎ落つ
煮凝や戦後を人のさまざまに
人来ては覗く大暑の枢窓

この句集で私の好きな句を挙げさせていただいた。

川を見て老人立てり終戦日
広島忌雷雨となりて海叩く
深酒をなつかしむなり破れ蓮^{はす}
酔ひたるが酔ひたるを抱き春の泥
鶏頭の影地に倒れ壁に立つ
耕して崖にいたれり崖覗く
あめんぼを弾きとばせりあめんぼう
鎖なす牡蠣を海より抜きあぐる
鉄の蓋あけて人出づ秋の暮
七十や大根の葉に雪少し

林徹句集：文学の森社
(平成16年12月発行)定価2,600円